

第 3 章

父親の仕事と 家庭のバランス

後藤 憲子 (1節)

持田 聖子 (2節)

真田美恵子 (3節)



第1節

夫の側からみた、
妻の就業に対する考え方

約6割の夫は、子どもが生まれたら妻が仕事を一時やめることを望んでいる。妻の年収が高いほど、「妻が仕事を持つことへの賛成度」の比率は高くなる傾向にある。性別役割分業意識の薄い夫は妻の仕事への賛成度が高いが、出産後の仕事の継続には必ずしも賛成ではない。

●妻の64.1%は専業主婦

この報告書では回答者を「父親」と呼んでいるが、この節では配偶者（妻）との関係を聞いているため、回答者を「夫」、配偶者を「妻」と記述していることを最初にお断りしておく。ここでは、妻の就業状況や年収などを押さえたうえで、夫が女性と仕事についてのどのように考えているのか、また妻が仕事を持つことへの賛成度はどうなっているのかをみていこう。

まず、回答者である夫に妻の就業状況をたずねた結果が図3-1-1である。「専業主婦」64.1%、「常勤（フルタイム）」17.3%、「パートタイム」11.9%という割合になっていた。

子どもの年齢別にみると、年齢が上がるにしたがって「専業主婦」は減少傾向がみられ、「パートタイム」は増加傾向がみられた。それに対し、「常勤（フルタイム）」は増加幅が小さく、0歳児がいる場合15.1%で、その後は多少増減があるものの、6歳児で21.1%だった（0歳児→6歳児で6ポイント増）（図

3-1-2）。

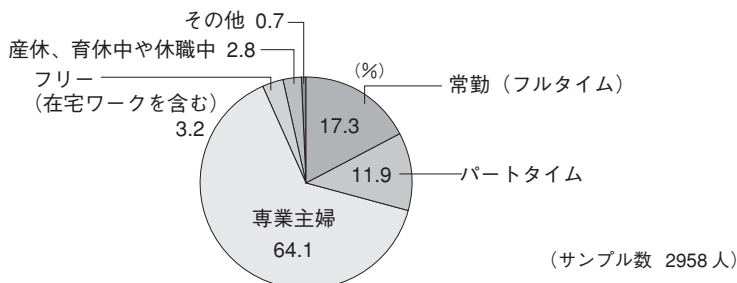
妻の年収をみると「収入はない」が6割を占め、収入があっても「200万円未満」が23.5%と多くなっている。200万円以上では、「200万～400万円未満」6.9%、「400万～600万円未満」5.0%、「600万円以上」が2.3%であった（図3-1-3）。就学前の子どもを持つ家庭では、夫と同程度の収入がある妻は非常に少なく、夫の収入が家計の大部分を占める家庭が約6割となっている。このことを前提として、以下、夫が妻の就業に対してどのような考え方を持っているかをみていこう。

●約6割の夫は子どもが生まれたら、
仕事を一時やめることを望んでいる

夫は、一般的に女性が仕事を持つことをどのように考えているのだろうか。女性が結婚して子どもを持つことと仕事について、7項目から1つ選択してもらった結果が図3-1-4である。

最も多いのは、「出産後一時退職、子ども

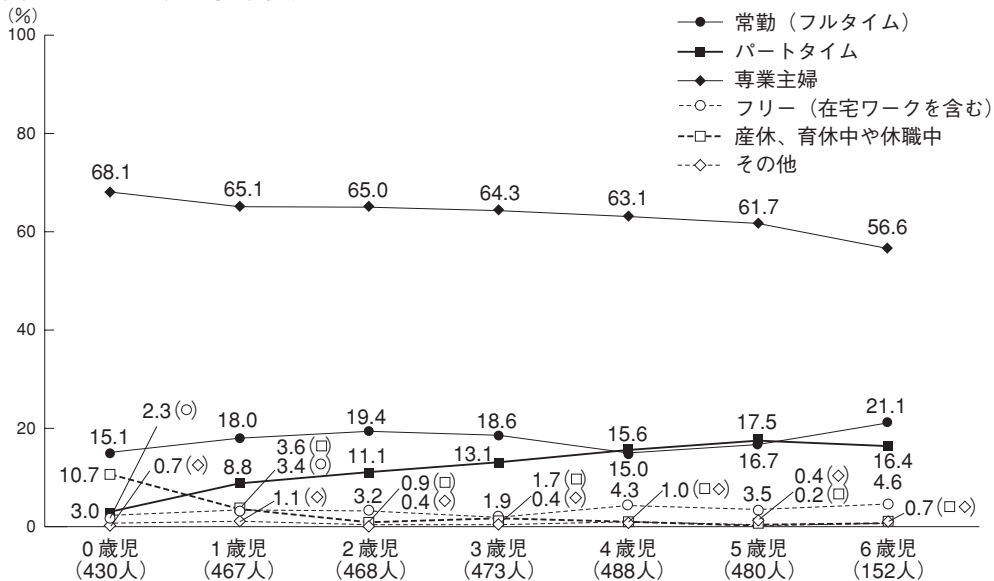
■図3-1-1 妻の就業状況



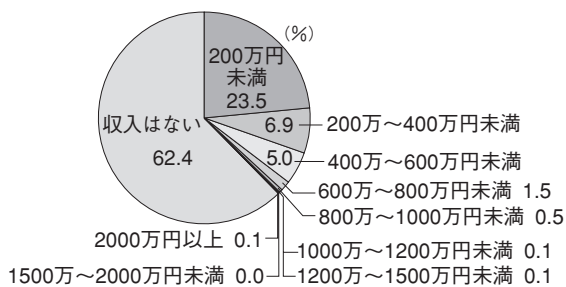
が大きくなったら復帰」で全体の63.4%であった。「仕事は持つが、結婚したら退職」はさすがに少なくなったものの、多くの夫は出産を機に一時仕事をやめるのがいい、と考え

ている。次に多いのは「出産後も仕事を継続」で、21.7%だった。では、妻が仕事を持つことへの賛成度はどうなっているのだろうか。

■図3-1-2 妻の就業状況(子どもの年齢別)

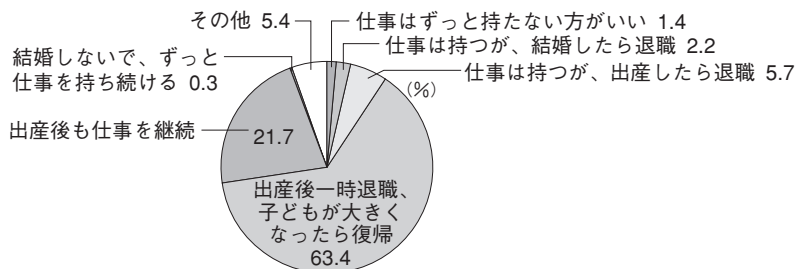


■図3-1-3 妻の年収



(サンプル数 2780人)

■図3-1-4 女性が仕事を持つことへの考え



注) 項目は一部、略記した。詳細は「調査票見本」(p.79)を参照のこと。

(サンプル数 2958人)

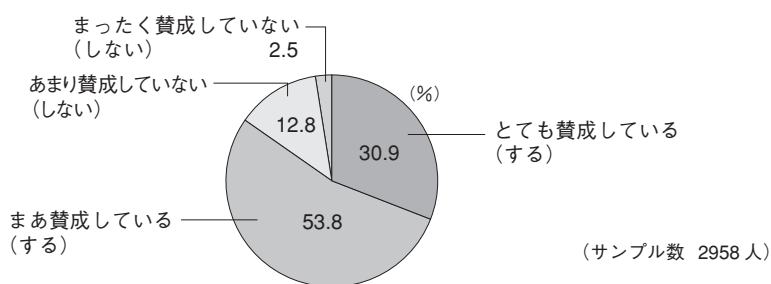
●妻が仕事を持つことに「とても賛成」は30.9%、「まあ賛成」は53.8%。
妻の年収が200万円以上あると、「とても賛成」が半数以上になる

妻が仕事を持つことに対して、「とても賛成している（する）」から「まったく賛成していない（しない）」まで4つの選択肢から選んでもらった結果が図3-1-5である。約半数の夫は妻が仕事を持つことに「まあ賛成している（する）」と回答し、「とても賛成している（する）」と合わせると8割強の夫が賛成している。

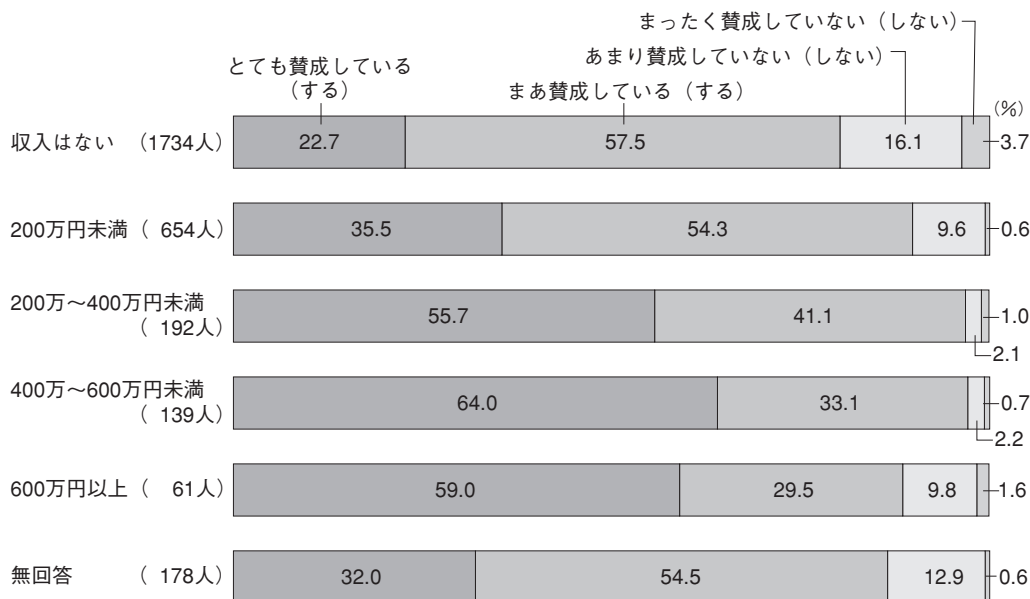
妻が仕事を持つことへの賛成度はどのような事柄と関係しているのだろうか。まず、家計への影響からみてみよう。妻の年収との関係をみると、次のような傾向がみられた。

妻の約6割は年収がないことを念頭に置く必要があるが、「200万～400万円未満」では「とても賛成している（する）」の割合は55.7%、「400万～600万円未満」では64.0%となっている（図3-1-6）。妻が仕事を持つことへの賛成度は、妻の年収が世帯年収に及ぼす影響の大きさに関係していると言えるだろう。

■図3-1-5 妻が仕事を持つことへの賛成度



■図3-1-6 妻の年収（妻が仕事を持つことへの賛成度）



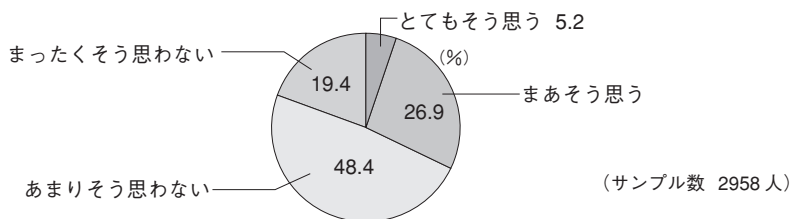
● 性別役割分業意識の薄い夫は妻の仕事への賛成度が高いが、出産後の仕事の継続には必ずしも賛成ではない

次に、性別役割分業意識と妻が仕事を持つことへの賛成度の関係をみてみよう。本調査では「男は外で働き、女は家を守るべきという意識が強いほうである」という項目に対し、「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの4つの選択肢から回答してもらっている。「まったくそう思わない」と「あまりそう思わない」を合わせると67.8%で、全体的に性別役割分業意識は強くない(図3-1-7)。

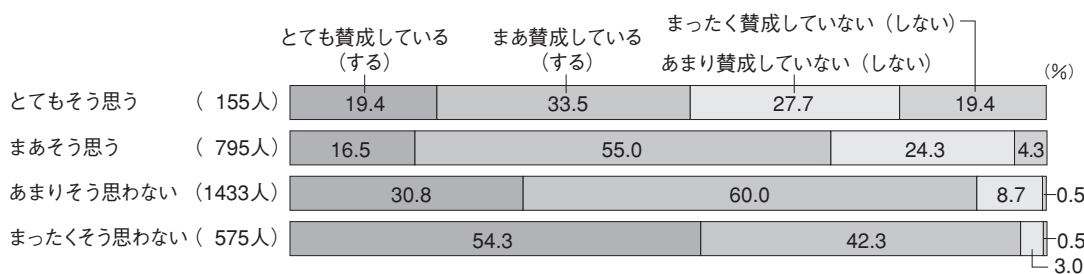
「まったくそう思わない」を選択した人19.4%のうち、妻が仕事を持つことに「とても賛成している(する)」を選択したのは54.3%で、他の選択肢を選んだ人よりは、妻の仕事への賛成度は高くなっている(図3-1-8)。

しかし、女性が仕事を持つことへの考えとの関係をみると、「出産後も仕事を継続」は41.0%、「出産後は一時退職、子どもが大きくなったら復帰」は45.0%と分かれる(図3-1-9)。性別役割分業意識が薄く、妻の仕事への賛成度が高い夫でも、半数近くは「出産後は一時退職、子どもが大きくなったら復帰」を選択していた。その理由は今回はわからないが、出産後、女性が仕事を継続していくには職場は厳しい環境である、という夫の認識が強く反映されているためかもしれない。

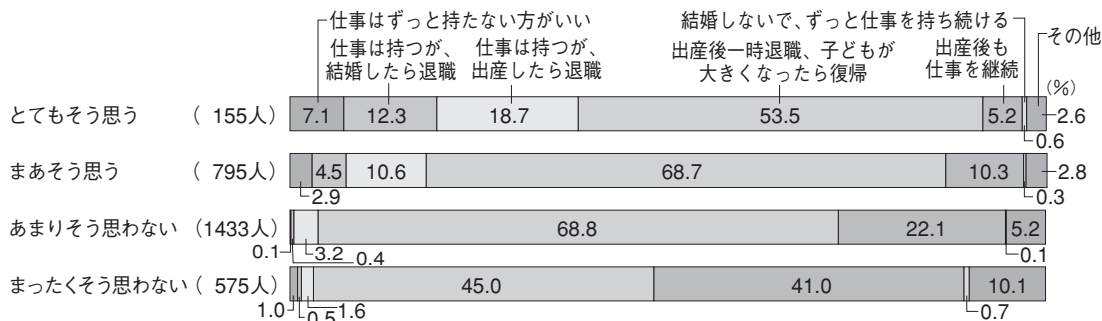
■ 図3-1-7 男は外で働き、女は家を守るべきという意識が強いほうである



■ 図3-1-8 男は外で働き、女は家を守るべきという意識が強いほうである(妻が仕事を持つことへの賛成度)



■ 図3-1-9 男は外で働き、女は家を守るべきという意識が強いほうである(女性が仕事を持つことへの考え)



注) 項目は一部、略記した。詳細は「調査票見本」(p.79)を参照のこと。

第2節

育児休業制度の取得実態と
子育て支援策に望むもの

平成15年に「次世代育成支援対策推進法」が成立し、子育て支援に取り組み始めた企業や自治体も増えてきている。本調査では、父親の育児休業の取得経験率は2.4%だったが、他に23.0%は「使いたいけれど使えなかった」と回答している。非取得理由には、職場に迷惑をかけることや、多忙が多く挙げられた。父親が使いやすい子育て支援策としては、フレックスタイムなど柔軟な勤務形態の整備や、男性の育児休業の取得義務化などの法的制度の充実を求める声が多かった。

● 育児休業制度の活用実態

本調査では、育児休業取得経験者は全体の2.4%だった(図3-2-1)。

非取得者に関しては、74.6%が「使おうと思わなかったし、使わなかった」と答えているが、23.0%は「使いたいけれど使えなかった」と回答しており、条件を整えば、父親の約4分の1が育児休業を取得する可能性があることがわかる。

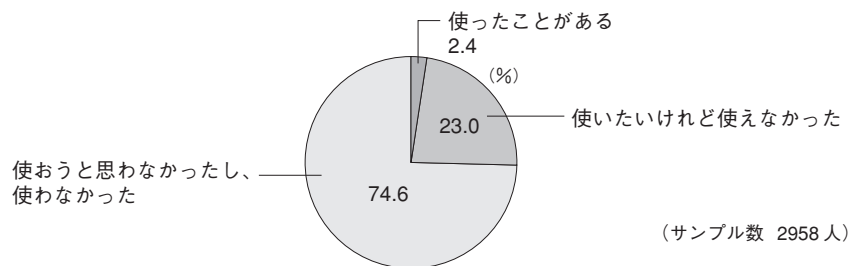
では、なぜ父親たちは育児休業を取得しなかったのだろうか。本調査では、非取得者に対して、その理由を聞いた。予め設定した13項目からあてはまる理由を3項目まで選んでもらった。

非取得理由を上位から順に並べた結果が図3-2-2である。「職場に迷惑をかけるから」

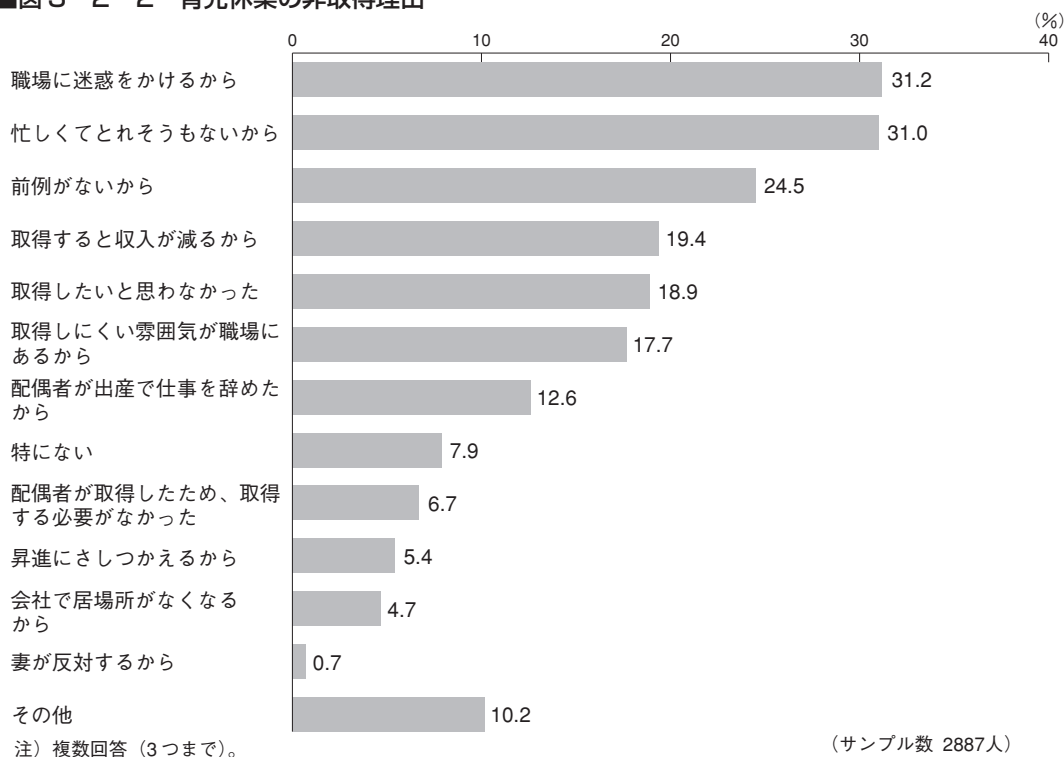
(31.2%)や、「忙しくてとれそうもないから」(31.0%)という、職場への影響や、多忙を理由とする回答が最も多かった。次いで、「前例がないから」(24.5%)が続き、「取得すると収入が減るから」(19.4%)という経済的理由が第4位に来ている。「取得したいと思わなかった」と回答した人も18.9%いた。

回答に「その他」を選んだ人には、具体的に非取得理由を記述してもらった(表3-2-1)。回答者291人中、75人が「職場に制度がない(なかった)」と記述しており、最も大きな理由であった。次いで、「自営業など、職種・労働環境により取得しなかった/できなかった」(54人)、「妻が専業主婦」(37人)という理由が続く。また、「制度を知らなかった」(31人)という人もいた。

■図3-2-1 育児休業の取得状況



■図3-2-2 育児休業の非取得理由



■表3-2-1 育児休業の非取得理由の主な自由記述

	(人)
「使いたければ使えなかった」回答者	79
職場に制度がない (なかった)	35
妻が専業主婦	11
自営業など、職種・労働環境により取得できなかった	6
転職直後など、取得対象外だった	6
制度を知らなかった	6
「使おうと思わなかったし、使わなかった」回答者	212
自営業など、職種・労働環境により取得しなかった/できなかった	48
職場に制度がない (なかった)	40
妻が専業主婦	26
制度を知らなかった	25

(サンプル数 291人)

●「職場の環境」により、育児休業を 使いたいけれど使えなかった父親

父親の中には、前述のとおり、育児休業を使う意向はあったが、「使いたいけれど使えなかった」と回答した人が、全体の23.0%いた。回答者はどんな人だろうか。また、どんな要因が、取得を阻んだのだろうか。

「使いたいけれど使えなかった」人の主な非取得理由は、「職場に迷惑をかけるから」「忙しくてとれそうもないから」「前例がないから」「取得しにくい雰囲気職場にあるから」であった（図3-2-3）。「使おうと思わなかったし、使わなかった」人と比較すると、いずれも10ポイント以上高い。育児休業をとりたくてもとれなかった人にとっては、職場の環境が大きな阻害要因となっていることがわかる。

また、「使いたいけれど使えなかった」人で「その他」を選択し、自由記述に回答した79人のうち、35人が「職場に制度がない（なかった）」と回答している（表3-2-1）。また、「妻が専業主婦」も11人いた。現在の育児・介護休業法では、配偶者が専業主婦（夫）の場合や、育児休業を取得するなどして、子どもを養育できる状態である場合は、夫（妻）は育児休業を取得できないという規定を、労使協定があれば就業規則等に盛り込むことができる。「使いたいけれど使えなかった」の背景にはこのような要因もあった。

「使いたいけれど使えなかった」と回答した人の、妻の就業状況はどうだったのだろうか。妻が常勤者なら、妻の負担を軽減するために育児休業の取得を検討したものの「使いたいけれど使えなかった」夫もいるのではないだろうか。図3-2-4は、妻の就業状況別にみた夫の育児休業の取得状況である。育児休業を「使いたいけれど使えなかった」と回答している比率は、妻が「常勤（フルタイム）」は27.7%で、「専業主婦」(21.2%)と比

べると高かったが、数値に大きな差があるというわけではない。妻が常勤者の場合でも、妻が育児休業をとる場合が多いので、育児休業の取得を検討する夫が飛躍的に増えるというわけではないのだろう。

●育児休業を使おうと思わなかった 父親は、自営業か、妻が専業主婦が多い

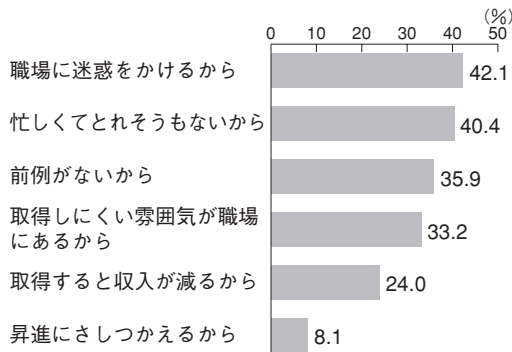
では、全体の4分の3を占める、「使おうと思わなかったし、使わなかった」と答えた父親は、どんな理由でそう答えたのだろうか。図3-2-3をみると、「使おうと思わなかったし、使わなかった」人の非取得理由は、「忙しくてとれそうもないから」(28.1%)、「職場に迷惑をかけるから」(27.8%)が多いが、「取得したいと思わなかった」(24.5%)も高く、そもそも育児休業の取得意思がない人が多く含まれている点が「使いたかったけれど使えなかった」人と決定的に違う点である。

育児休業の取得状況を妻の就業状況別に見ると、「使おうと思わなかったし、使わなかった」は、妻が「専業主婦」の場合が最も多く、77%だった。次いで「(妻が)産休、育児中や休職中」で、74.4%だった（図3-2-4）。

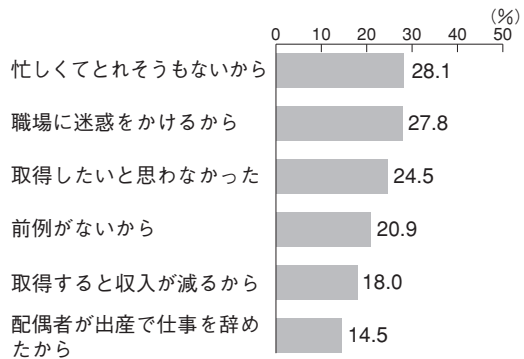
また、図3-2-5で、育児休業の非取得理由を就業状況別にみると、正社員は「職場に迷惑をかけるから」「忙しくてとれそうもないから」を挙げているのに対し、自営業・家族従業の人は、「その他」「特になし」を選ぶ割合が高く、「その他」の理由には「自営業のため」という自由記述が多かった。自営業という就業状況上、制度があっても、代わりに働いてくれる人がいないことや、休むことが収入減に結びつくため、育児休業自体を検討することがかなわない現状がうかがえる。

■図3-2-3 育児休業の非取得理由（Q23の回答別。上位6項目まで）

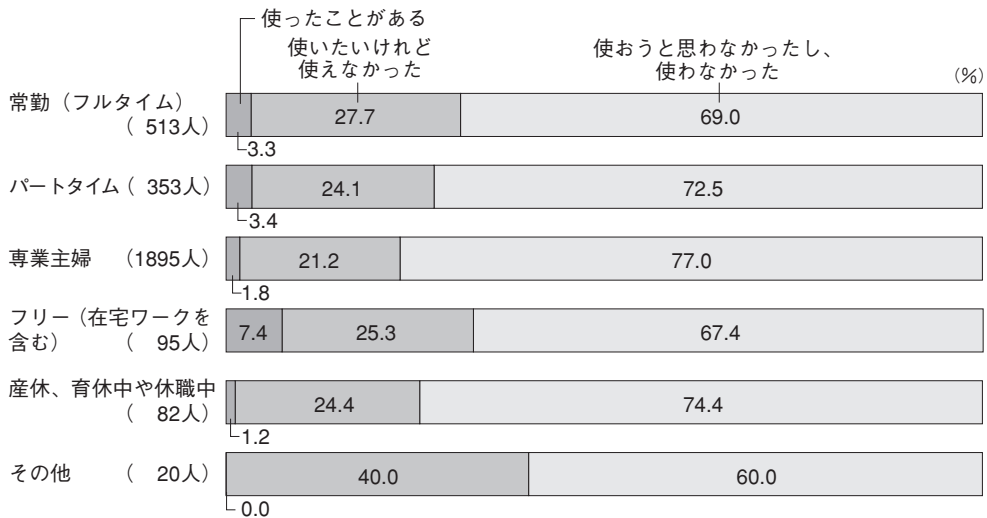
「使いたいけれど使えなかった」回答者（680人）



「使おうと思わなかったし、使わなかった」回答者（2207人）

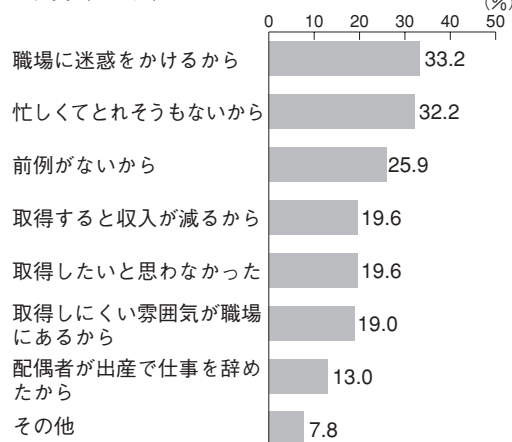


■図3-2-4 育児休業の取得状況（妻の就業状況別）

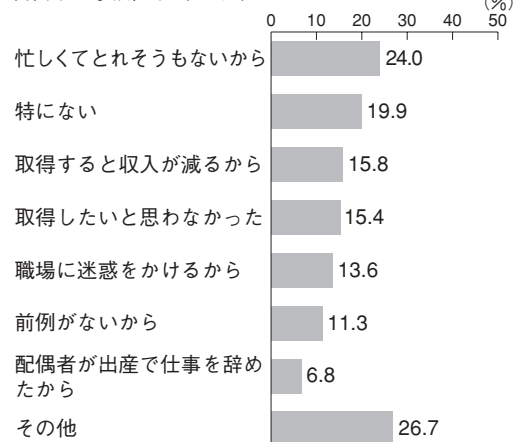


■図3-2-5 育児休業の非取得理由（就業状況別）

正社員（2511人）



自営業・家族従業（221人）



注）13項目のうち、8項目を図示した。

●父親が使いやすいと思う子育て支援策

男性が育児休業を取得するには、まださまざまなハードルが存在することがわかった。では、父親が育児に参加しやすくなるためには、どのような子育て支援策が望まれているのだろうか。本調査では、7項目から、使いやすいと思う支援策を複数回答で選んでもらった。「その他」を選択した人には、具体的な支援策を自由記述してもらった。

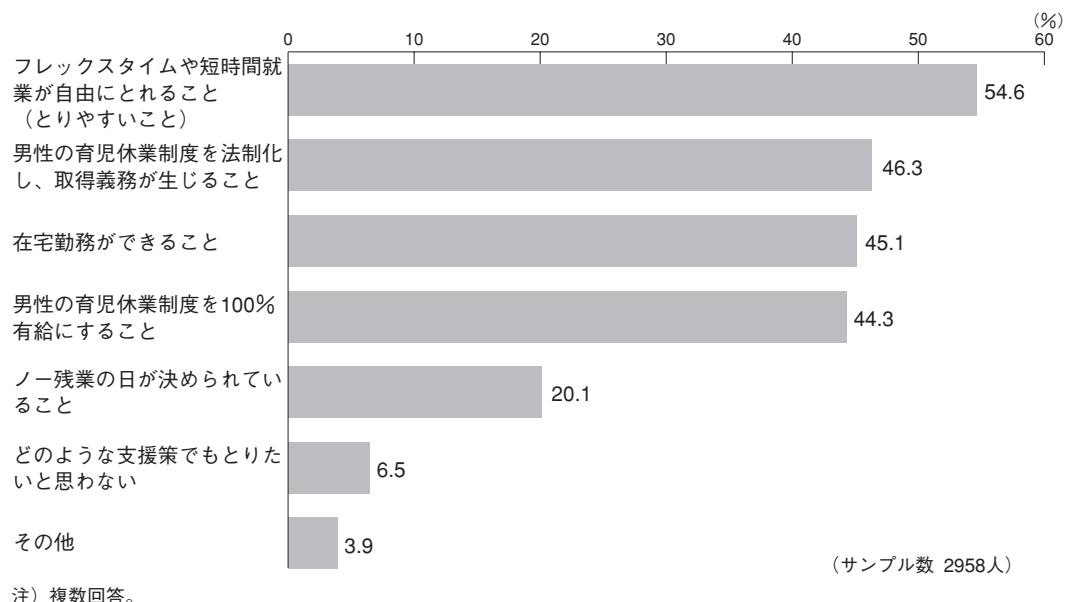
図3-2-6は、使いやすいと思う子育て支援策を上位から並べたものである。「フレックスタイムや短時間就業が自由にとれること（とりやすいこと）」(54.6%)、「在宅勤務ができること」(45.1%)という、柔軟な働き方を希望する人が多かった。また、「男性の育児休業制度を法制化し、取得義務が生じること」(46.3%)、「男性の育児休業制度を100%有給にすること」(44.3%)のように、法的制度や財政措置の充実を望む人も多かつ

た。育児休業を「使いたいけれど使えなかった」人は、使えなかった理由に厳しい職場の環境を多く挙げていたことから、父親が育児に参加するためには、制度的なバックアップが必要と感じている人が多いことがわかる。

「その他」を選んだ人の自由記述（116人が「その他」を選択し、113人が自由記述を記入）をみると、育児手当や税制面での優遇策などの経済的支援と柔軟な働き方について具体的に書かれたものが多かった（図3-2-7）。ほかには、子どもの預け先の充実を求める声や、男性が育児休業を取得することに対する世間・職場への周知徹底により、とりやすい雰囲気づくりを望む声も挙がった。

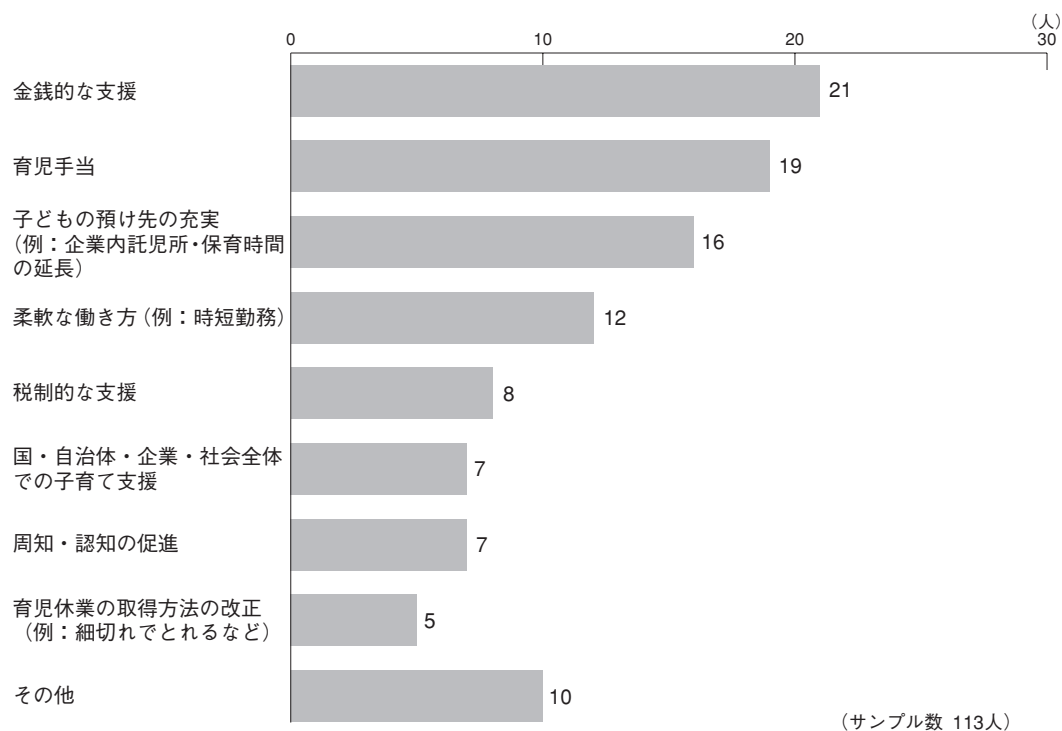
以上のことから、父親が子育てにもっとかかわれるようにするためには、さまざまな就業形態に沿ったかたちの子育て支援策を考えるとともに、男性の育児参加に対する周囲の理解・支援や、意識の改革が必要である。

■図3-2-6 使いやすいと思う子育て支援策



注) 複数回答。

■図3-2-7 使いたいと思う子育て支援策 (主な自由記述)



第3節

現在の生活満足度・
子育て満足度

現在の子どもの成長ぶりへの満足度は高いが、自分自身の子育てには約4割が「満足していない」と回答している。また8割以上の父親が「子どもを持つことを後輩にすすめ」、約半数が「もう一人子どもを持ちたい」と思う。

この節では、現在の生活や子どもの成長、妻と自分の子育ての満足度についてみていきたい。

●約4割が、自分自身の子育てに「満足していない」

図3-3-1をみると「現在のお子様の成長ぶり」への満足度は高く、「とても満足している」(28.0%)、「まあ満足している」(65.9%)を合わせると93.9%にのぼる。「妻の子育ての様子」も、「とても満足している」(23.4%)、「まあ満足している」(59.5%)を合わせると82.9%と高かった。一方「自分自身の子育て」については、約4割の父親が「まったく」+「あまり」満足していないを選んでいる。第1章第1節で触れたように「自分は子どもに必要とされている」「子どもを喜ばすことが生きがいだ」と思いながらも、平日に十分な時間を子どもと一緒に過ごせていないことが満足度に影響しているのだろう。

●「現在の生活」への満足度は、「自分自身の子育て」への満足度と関係があるようだ

また、「現在の生活」への満足度は、「現在のお子様の成長ぶり」や「妻の子育ての様子」より「自分自身の子育て」への満足度と関係があることがわかった(図3-3-2)。「自分自身の子育て」について「とても満足して

いる」を選んだ父親の60.2%が、「現在の生活」についても「とても満足している」と答えている。

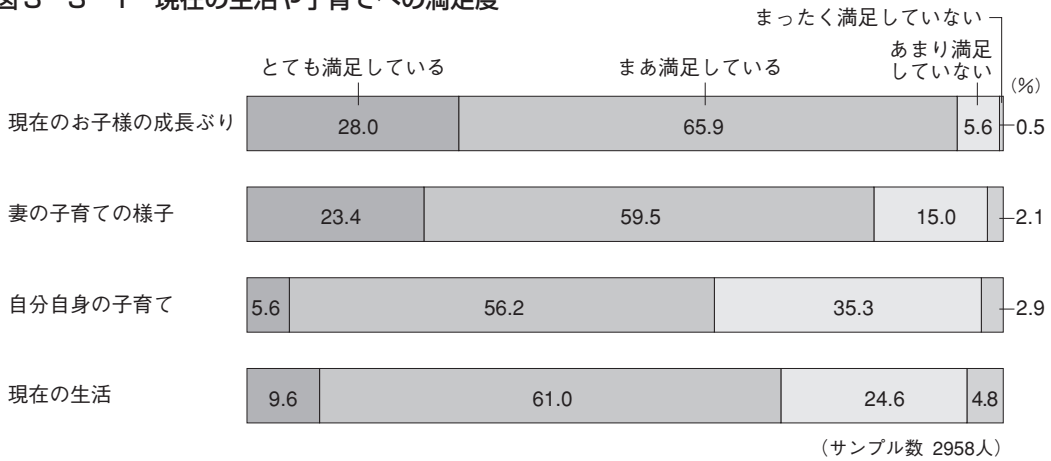
●8割以上が、「子どもを持つことを後輩にすすめる」

「あなたは、子どもを持つことを、後輩にすすめますか」という質問では、81.6%が「すすめる」と回答している(図3-3-3)。「すすめない」は2.2%と非常に少なく、「どちらともいえない」は16.2%であった。それぞれの選択について、理由を自由記述してもらった。

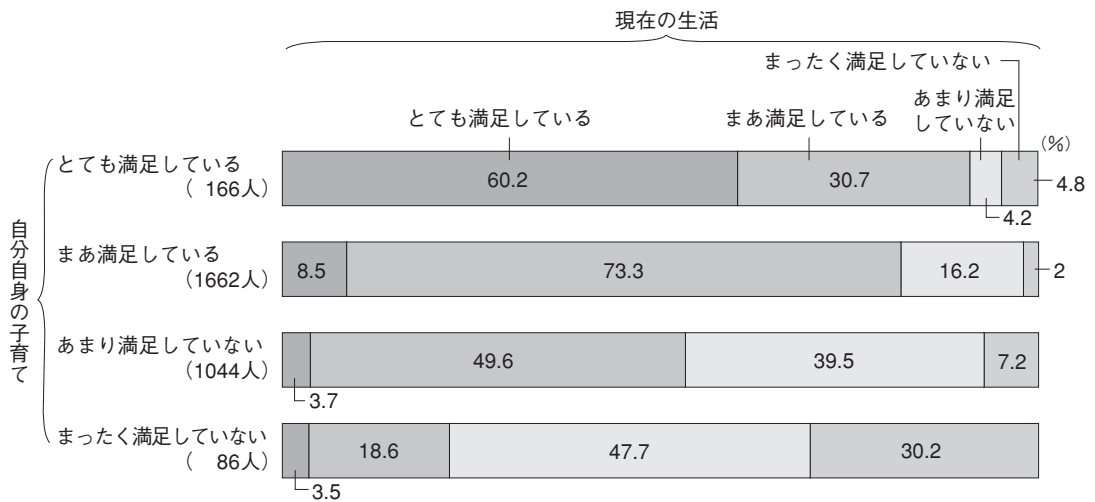
「すすめる」理由をアフターコーディングしたところ、多いものから順に「自分が成長できる」(728人)、「子どもは楽しい・かわいい」(686人)、「生きがいになる」(431人)、「子どもを持つのが自然の摂理」(83人)と並ぶ(表3-3-1)。妻との関係について触れたものは少なかった(「夫婦の絆が強くなる」27人)。回答が最も多かった「自分が成長できる」の内訳をみると、「人生観が変わる」「子どもから学ぶことが多い」などの意見が目立った。

「どちらともいえない」理由は、「個人の自由・人それぞれ」が圧倒的に多く、「経済的に大変」「楽しいけれど大変」が続く(表3-3-2)。「すすめない」理由は、「個人の自由・人それぞれ」「経済的に大変」「自由がなくなる」が続く(表3-3-3)。

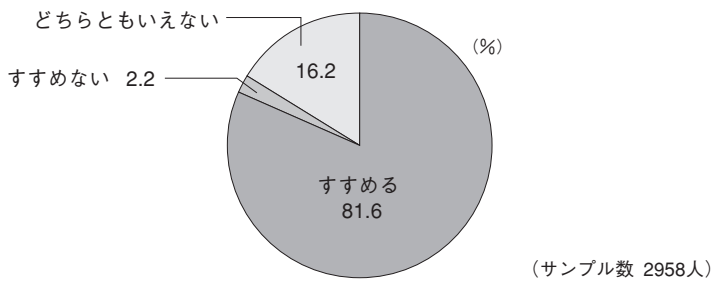
■図3-3-1 現在の生活や子育てへの満足度



■図3-3-2 現在の生活への満足度（自分自身の子育てへの満足度別）



■図3-3-3 子どもを持つことを後輩へすすめるか



■表3-3-1 「すすめる」理由

	(人)
自分が成長できる	728
子どもは楽しい・かわいい	686
生きがいになる	431
子どもを持つのが自然の摂理	83
貴重な経験ができる	79
日本の将来のため	47
子どもは宝	39
家庭が明るくなる	36
夫婦の絆が強くなる	27
子孫を残したい	18
自分の老後のため	9
その他	63

「すすめる」理由の自由記述より

- ・子どもを持つことで人生観が変わり、家族を守らなければという使命感が生まれる。社会を見る目が変わってくる。人間が成長する。
- ・人として足りないことが養われていく。子どもに教えられることがたくさんある。
- ・自分一人の人生よりも子育てからは学ぶことが全然多いので、それを経験できることはすばらしいことだと思うから。
- ・仕事も頑張ろうという気持ちになりますし、何より子どもの笑顔を見ると疲れなんか吹っ飛んでしまいます。自分自身の成長にもつながると思うので、胸を張ってオススメします。
- ・子どもの成長を見るのが非常に楽しいし、将来が楽しみなので。
- ・こんなに小さくても、歌もダンスも言葉もすぐに覚えるのは天才的にすごいし、一緒にいるだけでも楽しくて嫌なこと忘れられるくらいすばらしいことだと思います。
- ・ある日突然、子どもが成長したところに気がつくとか何ともいえない感激があります。

■表3-3-2 「どちらともいえない」理由

	(人)
個人の自由・人それぞれ	318
経済的に大変	20
楽しいけれど大変	18
子どもを育てるには不安な環境	14
自由がなくなる	10
その他	43

「どちらともいえない」理由の自由記述より

- ・社会的には子どもが必要なかもしれないけれど、個人的には本人が主体的に欲しがらべき。人にすすめられるものではない。欲しくないならそれでよい。
- ・子どもを持つことについては、人それぞれの考えがあるので、一方的に持ったほうがよいとか持たないほうがよいとか言えないと思う。
- ・経済的、肉体的負担が大きい。しかし、子どもからもらう喜びも大きい。
- ・負担になることは間違いないので、夫婦で子どもを持つことを望んでいなければきつい。他人が口出しをすることではない。

■表3-3-3 「すすめない」理由

	(人)
個人の自由・人それぞれ	17
経済的に大変	16
自由がなくなる	10
その他	14

「すすめない」理由の自由記述より

- ・家計を苦しめる。税金の負担が重い。
- ・自分の時間がとれなくなる。
- ・子どもを持つということはとてつもなく責任が重いことなので、軽々しく人にすすめるようなことはすべきでない。
- ・個人の自由で、人にすすめることでもない。
- ・自分の時間、妻との時間がなくなるから。育児費用がかかりすぎるから。

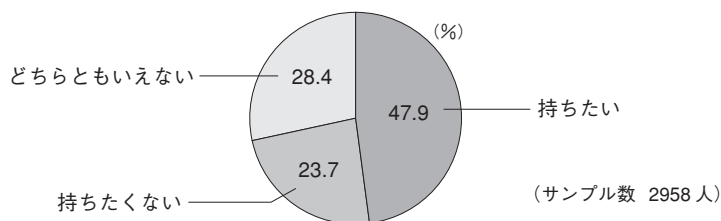
●約半数が、「もう一人子どもを持ちたい」と思う

次に「もう一人子どもを持ちたいと思うか」という質問に対しては、「持ちたい」が47.9%、「持ちたくない」は23.7%、「どちらともいえない」は28.4%という結果になった（図3-3-4）。現在の子どもの人数別にみところ、子どもが1人の場合は、68.7%がもう一人「持ちたい」と答えているのに対し、2人だと26.7%、3人以上になると16.8%に減る（図3-3-5）。

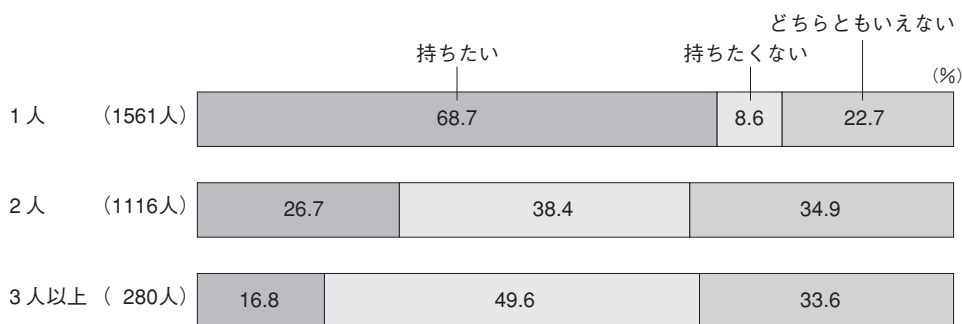
「持ちたい」理由は、「子どもの成長のためによい」（385人）、「一人っ子はかわいそう」（276人）のように、今いる子どもにきょうだいをつくってやりたいというものが多数を占める。次に「家族は多いほうが楽しい」（231人）、「別の性別の子どもがほしい」（122人）の順となる（表3-3-4）。

「持ちたくない」理由、「どちらともいえない」理由は、どちらも経済面での心配がトップで、次に「今の人数で十分」が続く（表3-3-5～6）。

■図3-3-4 もう一人子どもを持ちたいと思うか



■図3-3-5 もう一人子どもを持ちたいと思うか（現在の子どもの人数別）



注) 非該当1件を除く。

■表3-3-4 「持ちたい」理由

	(人)
子どもの成長のためによい	385
一人っ子はかわいそう	276
家族は多いほうが楽しい	231
別の性別の子どもがほしい	122
子どもはかわいい	60
自分の成長のために	52
2人(3人)はほしい	47
自分が2人(3人)きょうだいだったから	39
その他	118

「持ちたい」理由の自由記述より

- ・きょうだいの関係は大事でそこから学べるのがたくさんあるから。
- ・兄弟姉妹の存在は子どもにとって最も身近な他者であり、子どもの成長過程において、その存在は大きいと思うから。
- ・きょうだいはたくさんいたほうが、子どもたちにとって将来が安心だと思うから。
- ・きょうだいは小さな社会だから、思いやりや我慢を感じたり社会(学校など)に出る前に経験ができるから。
- ・子どもがたくさんいたほうが家の中が楽しいから。
- ・父親として、同性の子どもが欲しいから。
- ・今の子どもがとてもかわいいからまた欲しいと思う。

■表3-3-5 「持ちたくない」理由

	(人)
お金・生活が心配	347
今の人数で十分	208
自分の年齢を考えて	39
大変だから	30
妻の年齢を考えて	13
家が狭い	11
その他	53

「持ちたくない」理由の自由記述より

- ・2人でよい。
- ・3人で十分。
- ・子どもは2人でよいと夫婦で決めている。年齢的にもつらい。
- ・経済的にも大変だし、自分たちの時間もとりたい。
- ・教育費や子どもの将来の世界を考えると今よりも非常に大変になってくると思われる。苦勞することが想像できるので、これ以上子どもを持つのはどうかと思う。
- ・持ちたいとは思いますが家が狭いし、教育資金のことや妻が働きがたがっているのもう無理。

■表3-3-6 「どちらともいえない」理由

	(人)
お金・生活が心配	329
今の人数で十分	58
いい面と悪い面がある	39
自分の年齢を考えて	36
妻の年齢を考えて	29
家が狭い	20
その他	223

「どちらともいえない」理由の自由記述より

- ・今後の収入の変化によって決める。
- ・妻も高齢出産になるから。
- ・経済的、肉体的にこれ以上増えるのはつらいが子どもは好き。
- ・少子化時代だからたくさんいたほうがいいと思うが、現状の給料や国の制度ではこれ以上子どもを持つことは生活的に厳しい。お金の余裕があったり、国の制度がしっかりしているようなら持ちたいと思うかもしれない。
- ・本当はとても持ちたいと思っているが、住環境や経済面での不安がブレーキになっている。